

一般社団法人 日本歯科医学会連合
公益社団法人 日本口腔インプラント学会

共催シンポジウム

より質の高いインプラント治療を目指す
歯科医師と歯科衛生士と歯科技工士の連携

日 時: 2019年2月10日(日) 14:00~16:20

会 場: 京王プラザホテル (本館5階)

〒160-8330 東京都新宿区西新宿2-2-1

後援: 一般社団法人 日本歯科技工学会
公益社団法人 日本歯科衛生士会

お問い合わせ先: 一般社団法人日本歯科医学会連合事務局
jimukyoku@nsigr.or.jp

タイムスケジュール

14：00～14：10 開会の挨拶

住友 雅人（日本歯科医学会連合 理事長）

宮崎 隆（日本口腔インプラント学会 理事長）

14：10～14：40 歯科保健医療を取り巻く状況と職種間連携の課題

小嶺 祐子（厚生労働省医政局歯科保健課）

14：40～15：10 歯科医師からみた連携の課題

佐藤 裕二（昭和大学歯学部高齢者歯科学講座）

15：10～15：40 歯科技工士からみた連携の課題

西村 好美（デンタルクリエーションアート）

15：40～16：10 歯科衛生士からみた連携の課題

藤野 智佳子（医療法人社団秀和会つがやす歯科医院）

16：10～16：20 総合討論

シンポジウムの開催にあたって

一般社団法人 日本歯科医学会連合

理事長 住友 雅人

(公社)日本歯科医師会の全面協力で制作された歯科技工士が主人公の映画「笑顔の向こうに」が、平成31年2月15日に一般公開される。この映画は歯科技工士、歯科衛生士の仕事・役割というこれまでにないテーマで、「モナコ国際映画祭 最優秀賞作品賞(グランプリ)」に当たる《エンジェルピースアワード》を受賞した。

歯科医療従事者として歯科技工士、歯科衛生士は不可欠の専門職である。わが国においては高レベルの教育カリキュラムのもとに育成され、それぞれの専門性による法人組織を有し、歯科医師とともに国民に歯科医療を提供している。

さて私は歯科技工士の教育に関わったことがある。大学院で歯科理工学を専攻していたことから、大学附属の歯科技工士養成学校で歯科理工実習のインストラクターとして携わった。それまで歯科技工を職人的な側面からしか捉えていなかったが、教える立場になって、歯科技工の理論に裏付けされた高レベルの専門性を認識した。

歯科衛生士の教育の重要性に気づいたのは、医学部での麻酔研修の医療現場で見た看護師の厳しい目である。その目に耐えられるだけの知識と技能の習得が自分の麻酔レベルの向上につながることを身をもって学んだ。有能な看護師の存在が医師のレベルを上げるということを歯科界に当てはめれば、歯科衛生士の教育レベルを上げることが歯科医師のレベル向上にもなるとの想いで、全身的な見地からの患者管理と救命救急に重点を置いた歯科衛生士教育に力を注いでいた。

超高齢社会を迎えて高齢者歯科医療が重要な分野となってきた今日、より幅広い多職種との連携が重要になってきている。とりわけインプラント治療においては、全身的な患者把握と高度な技工技術が求められ、歯科衛生士、歯科技工士との連携が必須となってくる。チーム医療で歯科医師と常に連携を組む、高レベルの能力を有する歯科衛生士、歯科技工士の存在こそが、これからの歯科医療を支え、より向上させる、その協調と切磋琢磨から生まれる相乗効果に私は大いに期待している。

(一社)日本歯科医学会連合が平成28年4月に設立され、常置委員会の一つとして「医療職連携委員会」を設置した。このたび(公社)日本口腔インプラント学会との共催で、第38回 関東・甲信越支部学術大会において本シンポジウムが開催されることとなった。このような企画を実現していただいた学会関係者ならびに委員会委員に心からお礼を申し上げます。

シンポジウムの開催にあたって

昭和大学歯学部高齢者歯科学講座 教授

座長 佐藤 裕二

このたびは、重責である座長として、ご指名いただき、とても光栄に存じます。今回の趣旨は、「質の高い医療を患者が希望したり、患者の高齢化による在宅医療や介護施設等の入居者に対する口腔健康管理の重要性が増加してきている超高齢社会の現状」において、特にインプラント治療における歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士の連携のあり方についてシンポジウムをしてほしいとのことでした。

そこでまずは、厚労行政に精通された小嶺祐子先生に「歯科保健医療を取り巻く状況と職種間連携の課題」についてご講演いただくこととしました。歯科保健医療を取り巻く状況や歯科保健医療提供体制の今後の目指すべき方向性などをふまえ、在宅歯科医療におけるインプラント装着者の口腔管理の課題とそれらを解決するための歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士の連携のあり方について、お話いただきます。

次に、日本口腔インプラント学会 医療・社会保険委員会・研究推進委員会で高齢者のインプラントの研究を担当してきた私が、高齢者のインプラント治療に関しての2つの側面（高齢者にインプラント治療を安全確実に行うことと、インプラント患者が高齢になった際の適切な対応）について、「歯科医師からみた連携の課題」を講演いたします。

続いて、歯科技工人生約40年の西村好美先生に、歯科技工士の立場から、「歯科技工士からみた連携の課題」についてご講演いただきます。ここでは、AIなどを中心としたデジタル化の部分と人間の役割を考えたいので、歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士がともに考慮し、向き合う医療のあり方についてお話いただきます。

最後に、施設や病院への訪問診療での口腔ケアや口腔機能訓練、また施設や多職種との連携に積極的に取り組まれている藤野智佳子先生に、「歯科衛生士からみた連携の課題」をご講演いただきます。ここでは、症例を通して、歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士との連携と、施設や病院などの他職種との連携に関して、歯科衛生士としてのアプローチやコーディネートの方針についてお話いただきます。

最後の総合討論を通じて、今回のシンポジウムが、ご参加いただいた方々にとって、「より質の高いインプラント治療を目指す三職種の連携をさらに充実させるための一助」になるとと思います。

歯科保健医療を取り巻く状況と職種間連携の課題

小嶺 祐子

厚生労働省医政局歯科保健課 課長補佐



いわゆる「団塊の世代」（約 800 万人）が 75 歳以上となる 2025 年以降は、日本の総人口が減少する中で、高齢者人口の割合が増加することから、国民の医療や介護の需要がさらに増加することが見込まれている。このような社会構造の変化に対応するため、厚生労働省は「地域包括ケアシステム」の構築を目標に掲げ、可能な限り住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制の構築を推進している。

高齢社会の進展による患者像の変化や生活環境の多様化により、歯科疾患の疾病構造や治療内容は変化している。医療提供体制や歯科保健医療を取り巻く環境の変化等をふまえ、平成 29 年 12 月に「歯科医師の資質向上等に関する検討会」において中間報告書として「歯科保健医療ビジョン」をとりまとめ、地域包括ケアシステムの中で歯科医療機関が医療や介護に関わる関係機関等との連携の必要性を示している。

平成 28 年の歯科疾患実態調査の結果では 8020 達成者の割合が 50%を越えた一方で、一人平均喪失歯数は 50～54 歳で 2.0 本であり、以降年齢とともに増加し、75～89 歳では 10.3 本となっている。インプラント装着者の割合は、65～69 歳で最も高く 4.6%、75～79 歳においても 3.4%となっており、高齢者におけるインプラント装着者の割合は今後さらに増加すると予測され、それは在宅歯科医療を必要とする患者においても同様であると考えられる。このような状況においては、歯科医療機関間の連携や歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士の歯科関係者間の連携がより重要になる。

本シンポジウムでは、歯科保健医療を取り巻く状況や歯科保健医療提供体制の今後の目指すべき方向性などをふまえ、在宅歯科医療におけるインプラント装着者の口腔管理の課題とそれらを解決するための歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士の連携のあり方について、改めて皆様と一緒に考えたいと思う。

【略歴】

2000 年 東北大学歯学部卒業
2006 年 東北大学大学院歯学研究科博士課程修了
2008 年 東北大学大学院歯学研究科加齢歯科学分野助教
2011 年 厚生労働省関東信越厚生局健康福祉部医事課
2012 年 厚生労働省保険局医療課医療指導監査室
2012 年 厚生労働省老健局老人保健課
2013 年 厚生労働省東北厚生局健康福祉部医事課 課長
2015 年 厚生労働省保険局医療課 歯科医療専門官
2016 年 同 課長補佐
2018 年 厚生労働省医政局歯科保健課 課長補佐 (現職)

【MEMO】

歯科医師からみた連携の課題

佐藤 裕二

昭和大学歯学部高齢者歯科学講座 教授



歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士間の連携の重要性はこれまでも強調されてきた。しかし、社会の高齢化、歯科医療の高度化などにより、問題点も生じてきている。本講演では、インプラント治療に絞って、歯科医師からみた連携の課題についてお話ししたい。

高齢者のインプラント治療に関しては2つの側面がある。1つは、高齢者にインプラント治療を安全確実に行うことである。もう一つはインプラント患者が高齢になった際の適切な対応である。

高齢者に安全確実なインプラント治療を行うには、各種条件を適切に把握することが重要であり、これには口腔インプラント学会が推奨する「チェックリスト」がある。この使用に関しては歯科衛生士の十分な理解と関与が必要となる。また、これまであまり行われてこなかった口腔機能の評価に関しても歯科衛生士が重要な役割を担うべきである。健康保険でも有床義歯機能検査・口腔機能低下症の検査がある一方、さらに高度なはずのインプラント治療において、これまで口腔機能の評価が不十分であったことに関しては私自身も恥じる。

インプラント患者が高齢になり、通院が困難になった場合には、インプラントの管理が難しくなる。訪問診療におけるインプラント患者の実態に関しての大規模な調査結果についてお話しする。この際には存在するインプラントの種類などについて口腔インプラント学会が推奨する「インプラントカード」が有用である。さらに、出版されたばかりの「訪問歯科診療におけるインプラントのトラブル対応」というポジションペーパーを理解した上で、歯科衛生士・歯科技工士との協働が重要である。

歯科技工、特にインプラント関係はデジタル化し、高度になってきている。歯科技工士に対する大規模調査から見てきたインプラント技工を行う技工所と行わない技工所の比較などから、インプラント技工における連携について、お話しする。

以上の現状を踏まえて、最後に歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士、行政に対していくつかの提言を行いたい。

【略歴】

1982 年 広島大学歯学部卒業

1986 年 広島大学大学院（歯科補綴学Ⅰ）修了・歯学博士

1986 年 歯学部附属病院助手

1988 年～1989 年 アメリカ合衆国 NIST 客員研究員

1990 年 広島大学歯学部講師（歯科補綴学第一講座）

1994 年 同上 助教授

2002 年 昭和大学歯学部教授（高齢者歯科学）

【所属】

日本口腔インプラント学会 医療・社会保険委員会副委員長、研究推進委員会委員、
日本口腔インプラント学会・日本補綴歯科学会・日本顎関節学会：専門医・指導医、
日本老年歯科医学会：理事長、専門医・指導医

【MEMO】

歯科技工士からみた連携の課題

西村 好美

有限会社デンタルクリエーションアート 代表取締役



近年、コンピューターの技術革新が急速な勢いで進む中、従来人間が行っていた仕事が、今後10～20年の間で約半数がロボットや機材にとって代わられるであろうと推測されている。具体的には、オックスフォード大学の准教授マイケル・A・オズボーン氏が研究員カール・ベネディクト・フライ氏とともに2015年に発表した「未来の雇用 いかに仕事はコンピューター化されていくのか？」の論文において10年後になくなる職業として「義歯製作者」が入っており、歯科医療の職域の中でも、いち早くデジタル化の影響を受けるのが歯科技工士であると言われている。そこでまず、歯科技工業界および歯科技工士の現状について考え、整理してみたい。

上記で述べたことを踏まえると、われわれ歯科技工士は、AIなどを中心としたデジタル化の部分と人間の役割を考えざるを得ない状況にある。しかし、いかにコンピューター化や工作機械が進化しようとも、現状、それだけでは最高のインプラント補綴装置が製作出来るものではないと考える。なぜなら、そこには、その設計を左右する歯科技工士に知識が必要であり、個々の患者に合わせたガイドラインとしての審美性や機能構造力学、生物学など十分に評価され、製作されていることが必要だからである。同時に患者を中心としたインプラント治療を成功させるために重要なことは「情報の共有と連携」である。歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士の三者がお互いにしっかりと情報を共有しあい、同じゴールに向かい、各々の立場での専門性をしっかり行うことである。歯科医療においてはインプラント治療を含め、個々の患者の生理的な咬合の評価基準が重要であると同時に患者にとっては治療期間よりもそれ以後の時間の方が長く、身体的な変化も個々においてさまざまである。そこに対しても歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士がともに考慮し、向き合う医療のあり方が今後、重要であり、そのことは患者に大きな恩恵があると信じている。

以上のことを踏まえ、このセッションのメインタイトルである「より質の高いインプラント治療を目指す歯科医師と歯科衛生士と歯科技工士の連携」を念頭に歯科技工人生約40年における歯科技工士の立場からみた連携の課題についてお話させていただきたい。

【略歴】

- 1982 年 行岡医学技術専門学校 歯科技工士科卒業
- 1988 年 日技生涯研修認定講師
- 1991 年 有限会社デンタルクリエーションアート開設
- 1995 年 SJCD 歯周補綴テクニシャンコース講師
- 1999 年 にしむら塾主幹（東京・大阪）
- 2002 年 咬合・補綴計画セミナー招聘講師
- 2007 年 日本歯科審美学会認定士及び評議員
- 2009 年 新大阪歯科衛生士専門学校卒業（歯科衛生士国家資格所持）
- 2010 年 大阪大学歯学部付属病院歯科技工スーパーバイザー就任

【所属】

日本歯科技工学会、日本歯科審美学会 認定士、日本臨床歯周病学会 準会員、
日本デジタル歯科医学会 評議委員、日本口腔インプラント学会、日本スポーツ学会、
学会活動および専門誌への執筆など

【MEMO】

歯科衛生士からみた連携の課題

藤野 智佳子

医療法人社団秀和会 つがやす歯科医院 歯科衛生士



昨今、日本においても、世界でも類を見ない超高齢社会に突入し、私達歯科医療従事者が担う役割は、たいへん大きいといえる。1999年米山先生らが発表した論文では、専門的口腔管理、口腔ケアや機能訓練などを行い、現在日本人の死因3位である誤嚥性肺炎を6割以下に減少することが出来たことが証明されてる。また、健康長寿のための3つの柱は、口腔機能の維持、心理状態の維持、身体活動の維持であり、人とのつながり、生活の広がり、誰かとの食事は、サルコペニアを予防するといわれているが、健康なうちは、歯科医院に来院でき定期的なメンテナンスを受けられても、一度何らかの疾患に罹患し、社会からの関係が切断されると、負の連鎖に陥り、やがてフレイルになり寝たきりになってしまっているのが現状である。また、来院している患者もメンテナンス時に、口腔機能低下検査や、看護師、管理栄養士が問診を行い、早い段階で発見し、生活改善や口腔ケア・機能向上訓練を行うことで、機能が早期に回復することは見込めるが、発見が遅れたり、来院でない状態になればなるほど、そこには歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士との連携と、施設や病院などの他職種との連携は必須であり、そこをどう私達歯科衛生士がアプローチし、コーディネートしていくかがカギであるといえる。現在行っている日々の臨床や施設や病院への訪問診療での口腔ケアや口腔機能訓練、また施設や多職種との連携や問題点など、症例をご紹介しますながら皆様と一緒に考えていきたいと思う。

【略歴】

1989 年 旭川歯科学院専門学校卒業
一般開業医院勤務

2003 年 フリーランス歯科衛生士

2004 年 小樽歯科衛生士専門学校 非常勤教員

2005 年 (社)日本歯科衛生士学会 北海道支部理事

2006 年 スウェーデンイエテボリ大学 サマーセミナー受講

2007 年 (社)日本歯周病学会 認定歯科衛生士

2008 年 (社)日本口腔インプラント学会インプラント専門歯科衛生士

2011 年 医療法人社団 秀和会 つがやす歯科医院勤務

2015 年 日本医療機器学会認定 第二種滅菌技士

【所属】

日本歯科衛生学会、日本歯周病学会、日本口腔インプラント学会、日本医療機器学会

【MEMO】